



女子  
女体化報告書

クリエ君の

レポート

Transsexual  
Secret Room

illustration  
四条 なら玉井

R18

Report00 : ♀Creator

若いうちに世界を見回って経験を積みたい。

ファミガリヒタルゼンの裕福な家庭を出て、冒険者アカデミーに入学したのは少年の頃だ。  
商人ギルドに入り、回復薬をカートに積んで、モンスターを倒しながら行商をしていたのも懐かしい話で、今は攻城戦ギルドで要職を務めている。

世界を回る、という目的はとうに終えた。

元々残酷な性格であることは自覚している。錬金術師ギルドからの要請があれば医者  
の仕事をやる。攻城戦があれば人を殺し、捕虜を拷問したり人体実験したりして遊ぶ。  
まさに趣味と実益を兼ねていた。ただ、そういう生活に慣れて、少し物足りなさを感じ  
始めていた。

……さて。

ここに一瓶の薬がある。

冒険者アカデミーで手に入れた、性転換の薬だ。真偽はともかく、効果があることは  
間違いない。

ファミは椅子に座って、机に頬杖をつけて小瓶を見ていた。

小瓶のてっぺんを人差し指で押さえてぐりぐりと回しながら、しばらく思索した。  
その姿は、赤いワンピースの女クリエイターだった。

……どうやって、遊ぼうか？

Report01 : ♂GuildMember \* ♀Creator

十月二十七日(月) 曇り

空中都市ジュノーの隣に、砦が一带に集まるニダヴェリールという地区がある。

その砦の一室で、ラミは全身鏡の前に立っていた。

鏡の中には、小柄で色白の女クリエイターが居る。いつも通り、白い手袋を嵌めた指先で、腰まである若草色のロングヘアを三つ編みにして、赤いワンピースを着た背中に垂らす。白い羽根が両サイドに付いたつば付きの赤い帽子を被り、部屋を出てラウンジに向かった。

数人の男ギルドメンバーが応接セットのソファに腰掛け、カードを手に笑ったり頭を抱えたりして騒いでいる。おそらく賭事をしているのだろう。

ブーツの底をカツカツと鳴らしてラミが近寄ると、それに気づいた全員が顔を上げて見た。

「こんにちは」

にっこりと笑うと、男達は訝しげに顔を合わせる。

「誰？」

「新人？」

「いや、聞いてねーぞ」

一人がギルドメンバー表を確認したが、ギルドメンバーは変わっていない。

ラミは遠慮なく大理石のテーブルの上に座る。

短いプリーツスカートから伸びる白い太股が露わになり、全員が目を奪われる。

「嫌ですね。僕ですよ、僕」

そう言って、帽子のつばの部分を手で頭から外す。そこで全員が、そのフリストの帽子を愛用している男クリエイターを連想した。ちょうど、目の前の女くらしいの身長で、髪型も同じだ。

「え、何？ 女装？」

男クラウンが少し馬鹿にした口調で聞く。ラミは無言でテーブルの上で足を開き、プリーツのミニスカートをたくし上げた。

純白の透かしレースをふんだんに使った、可愛らしい女物のパンツが現れる。

「うわ」

見たくないと言わんばかりにクラウンは顔を背けたが、他のメンバーのざわめきを

聞いて向き直る。

「嘘だろ……」

男ロードナイトが顔をしかめ、男スナイパーが面白そうにヒュウツと口笛を吹いた。そこには男の象徴である膨らみが全くない。

「性転換の薬ですよ。面白いでしょう？」

女クリエーターの洋服の胸元を下げると、形のいい乳房がこぼれ出た。それを誇示するように下から寄せ上げると、ラミは笑った。

「僕と遊びませんか？」

男達は再度、顔を見合わせる。

ここは表向きは攻城戦ギルドだが、名実ともにMPKなどの迷惑行為をする嫌がらせギルドとして通っている。攻城戦で得た捕虜は「男は殺す女は犯す」が習慣であり、毎週打ち上げと称しては女を輪姦しているのだった。

が、目の前の女は……。

顔の前で手を振りながら、男ハイプリストが引き気味に言った。

「いや、中身がアレじゃ無理です」

それを聞いてラミは黙って微笑を浮かべる。

本人もギルドメンバーにどう思われているかは知っている。男は殺す女は犯す。

それが信条のギルドの中で、ラミは主に前者だ。相手が男でも女でも、セックスよりも苦痛を与えて残酷にいたぶるのを好む、いわゆる猟奇趣味だ。

「ヤッてる最中に切り落としそうじゃないですか」

ハイプリーストが内心ビビりながら言うと、ロードナイトが応えた。

「ギルメン相手に猟奇は無<sup>ね</sup>えって決まりだろ。マスターも許さんよ」

ラミは黙ってポーチを開けると、鳥のクチバシの形をした銀色の器具を取り出す。女性器の中を覗く<sup>クスコ</sup>膣鏡だ。

片足をパンツからするりと抜き、テーブルに座って脚を開くと、その奥に薄桃色の花卉が現れる。男達の熱い視線が集まるのを肌で感じながら、ラミはその中へと閉じた先端をゆっくりと入れていく。

器具の冷たさに顔をしかめ、奥まで入れたところで、ラミは器具を広げる。クチバシが中で大きく開き、ほんのり湿って紅潮した内壁が外気に晒された。

「見ますか？」

全員の視点はそこに向いていたが、どうするか迷っていたり、他のメンバーの反応を探ったりしているようだった。

「……ち、ちょっと見たい」

クラウンがおずおずとラミの前に出る。つられるようにロードナイトも前に出た。「どうぞ」

クラウンはラミのすぐ前にしゃがみ込んで中を覗いた。銀色の器具で無理に開かれた蜜口の奥で、薄桃色の内壁が覗いていた。クラウンはしばらく凝視した後で息を呑むと、静かに座っていたソファへと戻る。ロードナイトは奥まで観察して、樂しげに「まっこんなモンだよな」と言った。

「どうだった？」

スナイパーが聞くと、クラウンはとても信じられないといった風に首を振り、

「グロかった」

そう呟き、スナイパーは吹き出した。

「聞きたいのはそーいうことじゃなくってさ」

「性器も内臓ですからね」

何でも無い様子でラミは応え、言葉を続ける。

「もういいんですか。自分で処女膜を破っちゃいますよ」

ラミが手の中のハンドルを握ると、クスコの先が膣内をこじ開けようとする。ラミ



は鋭い痛みで顔をしかめ、額に冷や汗を浮かべながらゆっくりと器具を開いていく。

「待てよ」

ロードナイトが煽りに乗った。少し慌てた声で制す。

「そんなに欲して欲しいなら、してやるよ」

この中で真っ先に動くのは彼だろう、とラミは思っていた。深く考えずに猛進する前衛らしい性格、それに負けぬ頑丈な身体、気性の荒さに性欲の強さ。最初の相手に相応しい。

ラミはクスコを抜いてテーブルの上に置く。器具がカツンと固い音を立てた。

ロードナイトが正面からラミを小突くと、ラミは仰向けにテーブルの上に倒れた。ロードナイトが身体の上に乗り上げ、その巨軀が光を遮り、ラミは完全に影に隠れた。

ラミは身長が低い。対するロードナイトの身長は二メートル近くもある。ロードナイトを見上げ、体格差を自覚して、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

そういうえば、今まで誰かに押し倒されたことは無い。それくらいに威圧感があった。

ロードナイトの手が太股に伸びて、スカートを捲まくり上げると、パンツに手をかけ

て乱暴に引きちぎる。布を裂く音がラウンジに響き、白い薄布が破り捨てられた。

ロードナイトはラミの足首を掴んで思いきり開脚させる。

白い太股の奥で、薄く色づいた女性器が複数人の面前で晒される。誰に触られたこともなく、自分で弄ったことすらないそこは、クスコで一度は開かれたにも関わらず、一本の線のように固く閉じていた。ロードナイトの太い指が花弁を左右に開くと、冷たい外気が膣内に流れ込み、ラミは軽い痛みに少しだけ眉をひそめた。

ああ、女はこんなに脚を開かないと出来ないのか。ラミは冷静にそう思った。

「本当に女じゃねーか」

ハッ、と軽い嘲笑を吐いて、ロードナイトはズボンのチャックを下ろし、既に屹立していた切っ先を乾いた女陰にあてがう。焦点を定めると、一気に体重をかけて挿入した。しようとした……が、入り口がわずかに広がっただけで、それ以上奥には進めなかった。

ぎちっ、とラミの身体が音を立てた気がした。その次に、繊細な粘膜が擦れてひきつる痛みがあった。激しい痛覚が下半身から一気に脳まで達する。

ラミは息を吐いて苦痛を逃そうとしたが、ロードナイトが身体に入ってくるに従って痛みは増していく。

「……痛う……ッ」

思わず苦痛に顔を歪めると、ロードナイトが残忍な笑みを浮かべていることにラミは気が付いた。攻城戦で見る、獲物を殺るときの笑みに似ていた。

「テメエがやれて言ったんだろ？ ほら、気張れよ」

痛いぐらいの力でラミの身体をpushさえつけ、勢いよく腰を打ち付けては、濡れてすらいらない固い膣内を無理にこじ開けていく。

「……ッは……」

脂汗を流しながら、ラミは深く息を吐いた。

ロードナイトが身体を寄せる度に、少しずつ肉槍が膣内を侵していくのが分かる。ロードナイトの雄は、処女膜で守られた雌の器官には大きく無謀すぎた。ラミは身体が軋む音を聞きながら、遠慮も気遣いもない挿入に耐える。

数分のことだったが、何十分もの時間に思えた。しばらくすると、男の動きが止んだ。なんとか彼のペニスを根本まで受け入れたようだった。

「きっついねえ」

ロードナイトは嬉しそうに言い、一度ずりりと引き抜く。

ラミが下腹部を見下ろすと、純潔の証で赤く色づいたペニスが見えた。痛いはず

だ。けれども、苦痛はこれで終わらなかった。

ロードナイトが再び肉棒を付き入れて本格的に腰を動かし始める。皮膚を剥ぐような痛みがラミを襲った。

「……あッ……」

脳天を裂くような衝撃に、思わず苦痛の吐息が漏れる。

ロードナイトのペニスが、腹の中で蠢いているのが分かる。身体に杭を打たれているようだった。

自分が満足するためだけの、獣のような前後運動。抱え上げられた脚も痺るびるように痛む。ひと突きが重く、内臓がせり上がるような感覚に囚われる。

「テメエのことだ、どうせ実験目的だろ？」

「……っぐ……」

額に玉のような汗を浮かべながら、ラミは口を開いたが、苦痛の呻きが漏れるばかりだった。喋る余裕など無い。

「後悔させてやるぜ」

ロードナイトがラミの脚を握る力を込め、さらに開脚させ、思い切り体重を掛けてはより深く強く挿入していく。

ラミの身体は、挿入時は苦痛を逃がそうと、勝手に息を吐いてしまう。ロードナイトが引き抜くたびに、ラミは思い出したように息を吸った。荒い呼吸を繰り返しながら、眉間に皺を寄せて痛みに耐える。

「いーねえ、その顔！ セックスはこうでなくっちゃな」  
嘲りの声がラミの上に降る。嗜虐的で歓喜に満ちたロードナイトの表情が目に入った。

「痛えか？」

ロードナイトが一度、陰茎を引き抜き、直後に思い切り奥へと突き入れる。

「……ッ」

思わず身体を引こうとしたが、脚全体を強く押さえつけられていてそれも出来ない。

「痛えかって聞いてんだよ！」

「……っ痛……」

痛いに決まってるじゃないですか。

いつもの口調でそう答えようとしたが、激痛で台詞セリフが繋がらない。緊張しているのか、喉もからからに渴いていた。ラミは自分を落ち着かせるように唾を飲み込む。そして、無意識のうちに歯を食いしばっていることに気付いた。

ロードナイトが嘲笑し、抽送ちゆうそうを再開する。今まで以上の激しい動きに、ラミの身体は人形のようにテーパーの上をがくがくと滑る。ポーションを入れた女クリエイターのポーチが、大理石の表面に触れるたびにカチャカチャとせわしなく鳴った。陰部は熱く腫れたように痛むのに、それ以外は激痛のために血の気が引いて冷たい。「……つく……ふッ……」

身体を覆うロードナイトの隙間からラミが天井を見上げると、近寄って見下ろす男達と目が合った。ラミは苦痛に喘ぎながら、激痛で涙混じりになった瞳で見返す。嘲笑していたスナイパーも、呆然としていたクラウンも、引いていたハイプリーストも、全員が熱い眼で凝視していた。彼らの視線が欲情の眼差しだと気付いて、ラミは意外に思った。

やる気のなかった男達が、今は劣情を抱いている。彼らの心を変えたことに興味が湧いた。

が、それも一瞬のことで、激痛で現実へと引き戻される。

思いのほか、ロードナイトは満足してくれたようで、ラミが痛みを堪えているうちに気を達した。お腹の内側に熱いものが流れ込んだ。ラミの体内で、ロードナイトの陰茎が脈打つ。

ロードナイトがラミから身体を離すと、精液と破瓜はかの血が混ざり合ったピンク色の糸が垂れた。代わりに、外気が膣中に入ってくるような冷感を覚える。

苦痛から解放され、ラミは荒い息をつく。身体を起こそうとしたが、太股が痛く、痺しびったようにうまく力が入らない。足を閉じると、長らく開脚の体勢を強いられて流れが止まっていた血液が、全身を巡る気がした。

「どーだった？」

スナイパーの言葉に、ロードナイトは鼻で笑って「自分で確かめろよ」とソファにふんぞり返った。

スナイパーはロードナイトと入れ替わりにラミの上に乗る。ラミの身体をひっくり返してうつ伏せにさせると、腰を高く掲げるポーズを取らせた。

ラミはテーブルに手をつけて、力なくそれに従う。

スカートが捲めくられ、お尻が外気に晒される。下半身に集中していた血液が全身に戻ったようだった。わずかに体温が上がり、空気がいっそう冷たく感じられた。

ロードナイトの残滓ざんしがどろりと太股を這う。その気持ち悪さに、赤いミニスカートぬぐの裾で拭う。と、スナイパーがラミの後頭部を掴んで、乱暴に机に押しつけた。

「顔が見えると萎えるし」

冷たい大理石の表面が頬を擦る。横に視線を這わせると、スナイパーのニヤついた笑顔がテーブルに映っているのが視界に入った。

スナイパーがラミの若草色の髪を束ねていたへアゴムを乱暴に外し、指先で三つ編みをぐしゃぐしゃと解く。ゆるいウェーブのかかったロングヘアがテーブルの上に垂れ、ラミの本来の面影は完全に消えた。

スナイパーがペニスの先端をラミの入り口に当て、角度を調整して突き入れる。

ラミは先ほどの挿入の激痛を思い出して身を固くしたが、ロードナイトの精液が潤滑油になりスムーズに入った。が、痛みがほんの少し和らいただけで、破瓜して間もない女性器にはまだまだ痛い。

ロードナイトのときほどの激痛は無かったが、それ故にスナイパーの熱い体温がはつきりと感じられた。体位のせいなのだろう、さっきとは違う箇所が痛む。同じ膣壁でも、前回は腹側に、今回は背中側に摩擦痛があった。そして、観察する余裕が出てきたことにも気付く。

ラミの臀部を両手で掴み、スナイパーがゆっくりと腰をグラインドさせる。ロードナイトよりは緩い動きだったが、熱を持った痛みが再燃していく。

頭を下にしているせいか、スナイパーが腰を打ち付ける度に、ラミの内臓がせり



上がる。子宮どころか胃まで突かれているような感覚だった。胃液が逆流しそうになり、思わず空気を飲み込んで嘔吐を抑える。詰まった喉元が熱い。

ラミは激痛と緊張で全身が汗だくだった。ラミは顔を横に向けたまま、テーブルに置いた手をぎゅっと握りしめた。

「ね、痛い？ 痛いよね？ キツイもん」

楽しそうな言葉。明らかに返事を求めている言い方だった。ラミは身を固くしているから余計に痛いのだと気付き、一息吐くと力を緩めた。痛みが和らいだ気がした。

それでも、挿入時のときは摩擦痛が起きる。思わず力を入れてしまい、根本まで<sup>くわ</sup>啜え込んだ膣の入り口が裂けるかのように傷んだ。

広間にパンッパンッと腰を打ち付ける音が響く。スナイパーが引き抜く度に、血が混じったピンク色の精液がかき出されて水音が立ち、机上に垂れていく。

ラミは出来るだけ力を抜いて、たまには呻き声を上げながら、息を長く吐いて痛みを逃すように努めた。

それに専念していると、次第にスナイパーの動きが早く小刻みになっていった。

終わりが近いのだと察して、ラミは下腹部に力を込めて相手の陰茎を締め付けた。

入り口の痛みは増したが、早く終わらせて欲しい気持ちでひたすら耐えた。

「出すよ」

スナイパーが激しく腰を打ち付け、ラミの身体が上下に揺れた。そのまま勢いよく射精し、ロードナイトのときよりも熱い奔流が子宮の中を満たしていく。嫌悪の中にわずかな快感を見いだし、ラミは身体の反応を意外に思う。

スナイパーは事が終わってもしばらく腰を動かしていた。管に残った最後の一滴まで注ぎ込んでラミから抜くと、穂先から垂れる滴をラミのスカートで拭く。テーブルに映るスナイパーの表情は、嗜虐に満ちつつも実に爽やかな笑顔だった。スナイパーが離れると、ラミは誰かの手で身体を起こされた。クラウンだった。クラウンはラミの脚の下に自分の下半身を潜り込ませ、ラミを上座らせる。それが騎乗位だと気付き、ラミは痛みの残る秘所に男根をあてがい、ゆっくりと挿入する。

自身の体重でラミの子宮口に亀頭が当たる。膈内と入口のひりつくような痛みにはだいたい慣れていた。

ラミはクラウンのズボンの上に手を置き、腰を浮かせて上下に動き始めた。結合部を見ると、先ほどよりは赤味の減った白濁が体内から噴出ふきだしていく。

クラウンが手を伸ばして、ラミの胸を下から押し上げて揉み始めた。乳首に指先が触れると、少し甘い感覚が脳に伝わる。それが快感なのだと思いき、ラミは確かめるようにクラウンの指先に突起を擦りつける。クラウンは気をよくして、ねっとりした動きで執拗に乳房を愛撫し始めた。

蕾の先端は徐々に尖り、ますます感覚が鋭くなる。空気の寒さに部位が固くなる感覚に似ていて、背筋にびりびりとした刺激が走る。ただ、寒さからの緊張とは違い、不思議な暖かさが脳に伝わった。

胸を捏ねられると、秘所の痛みから意識が逸れて苦痛が減った。ラミは乳房に意識を集中させた。苦痛の多い体勢だと思ったが、他の二人を相手にしたときよりは楽だった。

ラミは髪を揺らしながら跳ね、クラウンの顔を見下ろした。彼は目を輝かせてラミを見つめている。

スナイパーはラミの顔を見ないように交わっていたのに、この態度の違いは不思議だった。その嬉しいな視線には見覚えがある。彼の相手であるジプシーを見るときの目だ。

ラミは、自分の背格好が彼女に似ていることに思い当たった。おそらく、小柄な

女性が彼の好みなのだろう。

激しく動くにつれ、ラミの足は痺れて痛んだ。それでもクラウンの表情を観察しようとして上下に動くが、思ったよりも下半身にかかる負担が多い体位だった。足の痛みに耐えながら、ギルドメンバーの女性達は騎乗位のとときにこんな重労働をしているのだろうか、と疑問に思う。

「前後に動いたほうが楽だよ」

クラウンの言葉に、ラミは少し納得した。言われた通りに動くと、足の痛みは引いた。それでも、自分で動くと、つい痛みを避けて動きが緩くなってしまふ。

クラウンが身じろぎし、自分が丁度良くなるように角度を調整して、腰を突き上げる。ラミはそれに合わせて前後に動いた。

前屈みになると、相手の男に合った角度になるようで、クラウンが気持ち良さそうな表情に変わる。早く終わらせようとラミは判断し、痛みに堪えながら腰を動かす。

子宮口にクラウンの先端が当たると、彼は少し苦しそうな顔をする。それが快感によるものだと分かり、ラミはスピードを上げて前後に揺れる。他の部位に比べて、子宮口はそれほど痛みは感じず、激しく動くことができた。

しばらくして、熱く荒い息を吐き、クラウンはあっさりと射精した。内部に入りきらない精液が結合部からごぼりと溢れ、中腰になったラミの内股を伝っていく。相手を絶頂に押し上げた達成感と、征服欲に似た満足感を味わい、ラミは心境の変化を不思議に思った。

性交のときにリードを取った女性はこんな気持ちなのだろうか。そして、男は相手が自分の好みの場合は射精が早まるものだろうか。そう心の中でメモを取る。

クラウンが満足そうに離れ、最後にはハイプリーストが残った。彼は固唾を飲んで、一歩離れた場所からラミを見ていた。今までの情事を見てそれなりに勃起していたが、気分は乗らない。

ギルドメンバーの中で、ハイプリーストだけがラミの猥奇行為を見たことがある。ラミがギルドに入団した頃、ギルドマスターである痴女ビッチのパラディンが、いつものように「ちょっと新人ちゃん喰ってくる」とウキウキしながら彼の部屋に行った。数時間後、ハイプリーストはギルド会話でラミに呼び出された。『蘇生リザお願いします』と。

どれだけ激しいSMプレイをしたのかと思えば、彼の部屋は鉄臭く、ベッドの上には血まみれの肉塊と化したギルドマスターが居た。ラミは何事も無かったかのよ

うにズボンを履いているところで、それは射精したことを意味していた。ハイプリストは卒倒した。

翌日、マスターは渋い顔で「君、猟奇趣味は良くないよ」とラミに言い、乱交に混じるように命じた。マスターはラミに猟奇をやめさせて普通のセックスができるようにさせたいようだった。それ以来、ハイプリストは、ラミが乱交に混ざるときはチラチラと彼の様子を伺っているが、全く楽しく無さそうだった。

そんな男が女になったからといって、何が変わるといえるのか。ハイプリストがラミを前に硬直していると、スナイパーが茶化した。

「どーしたの？ ビビッてんの？」

他の三人は何事もなく終わったが、ハイプリストは自分だけにラミは何かしてくるのではと考えていた。何しろ、あの現場を見ているのはハイプリストだけだ。隠し持ったメスで切りつけられたりしないだろうか。

ラミは普段通りの表情の無い顔で、ハイプリストを見つめて行動を待っている。ロードナイトがはやし立てた。

「勃たなねーのか？ お前、ビビりだもんなー！」  
ハイプリストは少し焦って言う。

「違いますって」

ここでやらなければ、他の三人に馬鹿にされるのは目に見えている。ハイプリーストはそれだけは絶対に嫌だった。

意を決してラミの前に進むと、ラミのポーチを剥ぎ取って床に投げ捨てた。石畳の上にポーチが落ち、中の薬瓶や試験管が散らばる固い音が響く。

ハイプリーストの行動に、ラミは怪訝な顔をする。ポーチの中に刃物を隠し持っているのではないか、と疑念を抱いているとは露ほども思わない。

ラミはハイプリーストの最も苦手なタイプだった。何を考えているのか分からないし、表情の無い顔に感情の無い目をしているところもそうだ。

ハイプリーストは、どうせやるならもっと素直で大人しくて可愛い子が良かった。このままでは萎える。

そして、体格が似ているギルドメンバーの小柄なジプシーを思い浮かべ、ラミを彼女だと思うことにした。

ハイプリーストはラミの脚を開くと、身体を割り入れて男根を挿入した。怯えてはいても、膣内の温かく柔らかい感触に自身の固さが増す。ハイプリーストはラミの顔から視線を逸らし、結合部を眺めた。うっすらと血筋の伝う太股に白い精液が

泡のように溢れて零れている。ハイプリーストはジプシーの子を輪姦したときもこんな感じだった、と思いつく。ちょうどメンバーも場所も今と同じだ。

ジプシーの幼い顔立ちが怯える表情を頭に浮かべ、それが段々と女の喜色に満ちていくいつもの様子を思い描く。

ハイプリーストが動き始めると、ラミの身体が揺れた。ラミはもともと小柄で中性的な容姿ではあったが、今は見た目だけでなく、固い男の身体とは全く違う、本物の女の柔肌をしていた。

ラミの顔から上は視界に入れず、時々は目をつぶったりして、ハイプリーストはジプシーを思い浮かべながら抽送を続ける。ラミの穴で自慰をしているような、無機質で何の感慨もない行為だった。必死にジプシーのことを考え、無理矢理に自分の気持ちを昂ぶらせて射精感を高め、やっとの思いでハイプリーストは射精した。タイミングが合わずに腹の上に精を吐き出し、クリエーターの赤いワンピースが白濁で汚れていった。

情事を追えた男四人の視線の中、ラミはテーブルの上に仰向けに横たわり、精液



でドロドロになったままぐったりしていた。雄の青臭い匂いが辺りに充満している。

「いやー楽しかったー」

クラウンが笑顔で言い、ロードナイトもゲラゲラ笑いながら挨拶代わりに手を挙げた。

「また遊んでやってもいいぜ」

ギルドメンバーの笑い声と足音が遠ざかっていく。

ラミはしばらくぼんやりと天井を見ていたが、のろのろと起き上がると、おぼつかない足取りで部屋に戻った。未だに股間に物が挟まっている感覚があり、そこが裂けたように痛んで上手く歩けない。太股は、ロードナイトに強く掴まれた跡がアザになっていた。

自室に戻ると、ラミは薬品棚から四本の空の試験管を取り出し、衣服や肌についての精液をすくった。クスコを女性器に挿入して広げ、そこから垂れた精液も試験管に採る。誰がどの部位に射精したかは覚えている。

茶色いゴムの栓で試験管に蓋をすると、小さな白いラベルに文字を書いて貼っていく。そのうちの一つには『♂LK 21才 健康体』と記されている。他の試験管も同様だ。

ラミは女クリエイターの赤いワンピースを脱いで裸になり、濡らしたタオルで身体を簡単に拭く。あらかじめアルケミストギルドから取り寄せていたワンピースの予備に着替えると、椅子に座って机に向かう。

デスクの引き出しを開けて、今までの研究を記した薄緑色のノートと羽根ペンを手に取る。新しいペー지를開くと、ペンの先を黒色のインクに浸してこう書いた。

十月二十七日

処女を喪失した。痛みは指の皮を剥ぐ感覚に近い。

複数の男性と性交渉を行う。膣内と入口が腫れたように痛む。開脚の体勢を強いられることに因る筋肉痛も強く、未だ股間に物が挟まっている状態で、上手く歩けない。子宮口の痛みはなし。騎乗位が比較的楽だった。薬の効果は6時間。又、ギルドメンバー四人の精液サンプルを採取した。

Report02 : ofProfessor \* ofCreator

十一月三日(月) 晴れ

「しゆす繻子さん。僕とセックスして下さい」

「……は？」

ソファに横たわっていたギルドメンバーの女プロフェッサーは、読んでいた本から顔を上げ、眉をひそめて侮蔑ぶべつの表情で相手を見る。

「何？ それ女装？」

「ラムはすました顔で答える。

「性転換ですよ」

繻子は黒い瞳を見開いて上体を起こすと、細い指先をこめかみに当てて黒縁の眼鏡の位置を正し、ラムを二度見する。

「……あんたのすることについては今更驚くことじゃないけど。でもね」

繻子はしおりの代わりに指を挟んで本を閉じ、艶やかなロングの黒髪をかき上げる。改めてラムと向き直ると、一気にまくし立てた。

「あんたね。女体化してセックスとか気軽に言うけど、私が同性愛者だからって女相手なら誰でもいいとか思ってる？ お生憎様、私にも当然選ぶ権利はあるの。男じゃあるまいし、こんな昼間つからやらせる言ってる出来る訳ないじゃない。女の子っていうのは雰囲気大事な。そもそも人を誘うのにそのやる気ない見た目は何？ 例えば女装したのにスネ毛を剃ってない化粧もしてないみたいな、そういう中途半端なのが一番嫌いなよ。失礼でしょ、私に」

「分かりました」

ラムは二つ返事をして、足早にカプラ倉庫へと向かった。

倉庫の中を見渡すが、可愛い装備品が全くない。ふと、化粧品が目について、それを取り出す。オーデイン神殿でスコグルが落としたものだ。

自分の部屋に戻ると、机の上に鏡を置いて椅子に座った。ギルドメンバーの女性が化粧をしているところは何度も見ている。白粉おしろいをそれっぽく顔に塗り、眉毛を描き、口紅を唇に引いた。それから、無造作に結ゆった三つ編みをほどいてブラシで梳すく。ウェーブの癖の付いた長い緑髪をふんわりと背中に垂らす。

鏡で全身をチェックしてから再び縞子の部屋へ向かう。

「縞子さん。僕とデートして下さる」

相変わらずソファで読書をしていた繻子は、視線を本に落としたまま興味なさそうに言った。

「そういえば、夜の相手を探してるなら、そういう出会いの場所を教えてあげても良いわよ。割り切った付き合いのほうが良いでしょう」

「薬の効き目がいつ切れるか分からないんです」

「あんた、私が相手ならいいと思ってるの？」

そう言つて、だるそうに本から顔を上げたが、髪を下ろして化粧したラミを見て真顔になる。

「ふうん」

しおりを挟んで。ボタンと本を閉じ、身を起こす。

「ねえ、デートのルートは考えてるの？」

ラミは言葉に詰まったが、自分の狭い行動範囲の中で繻子の好きそうな物を並べた。

「プロのオムライス屋でランチして、中央図書館か古書店を回つて、アンティークに囲まれたコーヒー店で休憩して、最後はリヒタルゼンのホテルでセックスします」

「……あのね、最後の一言は余計なの」

呆れたように繻子は言い、ラミの頭の上から爪先までをざっと一瞥する。見定められてい

縹子は目が笑っていない作り笑顔を浮かべた。

「それじゃ、一緒にお風呂に入りましょうか」

「はい」

広い脱衣所で、縹子は眼鏡を外してさっさと脱ぐ。プロフェッサーの服を着ているときの姿そのままの、すらりとしているようで肉感のある裸体。黒髪と同じ色の陰毛。

縹子はバスルームに入ってピンク色のバスジェルを浴槽に入れ、お湯を張り始める。ラミは横目で見ながら二つ編みをほどこき、服を脱いだ。

ラミが胸元から下半身まで、タオルで前を隠しながらバスルームに入ると、薔薇の香りのする泡風呂に浸かっている縹子が吹き出した

「女の子みたい」

「女の子ですよ」

ラミが浴槽に入ると、縹子がラミに後ろを向かせて脚の上に座らせ、背面から抱き寄せ。温かいお湯よりも熱い縹子の体温がはつきりと伝わり、思わずラミは身を固くした。

「何？ 緊張してるの？」

「そうですね」

ラミは初めて攻城戦に出たときのことを思い出していた。それなりに緊張した。

「貴女、処女みたい」

縺子が言い、ラミは聞き返した。

「そうですか」

「でも、処女じゃ無くて童貞かしら」

反応をからかう声がラミの上以降る。

「ギルメンに処女をあげたので違います」

「私にできれば良かったのに」

そして、後ろから手を伸ばし、細い指でラミの唇をなぞる。

「こっちは？」

「初めてです」

「それじゃ、こっちの初めてを貰おうかしら」

縺子はラミの顎に軽く手を添え、自分のほうに向けさせると、目を閉じて軽くキスをした。

一度目は軽く。二度目は強く押し付けるように。

ラミは目の前にある縺子の顔を眺めた。黒く長いまつげが目元に影を落としている。

縺子の舌がラミの唇を上下に開いて潜り込んだ。ぬめる粘膜の感触に、ラミはたじろぎ

ながら、相手の舌の動きに任せた。鼻息がかかるのを気にしたが、縺子は気にしていない。縺子の舌が丁寧な歯列をなぞり、ラミの舌と絡む。

と、一度、唇を離し、再び唇を重ねた。今度は相手を確かめるように積極的に舌を絡める。唾液と鼻息が混ざり合う感覚。ラミは口腔から生まれる熱に息苦しさを感じた。

縺子がそつと目を開け、黒い瞳が覗いた。ラミの顔に添えていた手を解き、背中から抱きしめる。

縺子はラミの頭頂部に顎を乗せ、脇の下からそれぞれ手を差し入れて左右の乳房を揉み始めた。昼に繋いだ冷えた手とは違う、熱い手の平だった。

外側から寄せ上げるように手の平で捏ね回し、縺子はしばらく感觸を堪能していた。下から乳房を強く押し上げられると、胸筋がちくりと痛む。だが、それもすぐに慣れた。

縺子が指先で乳首の周りを円を描くように撫で始める。くすぐたさをラミは感じていたが、それは妖しい快感にじわじわと変わる。ラミの乳首は固くなり、尖って上を向き始めた。

時折、縺子の指先が蕾の先端を掠めると、甘い快感が身体を走る。きゅつ、と摘まれ



るとぴりつとした快感が刺す。ラムミの吐息は早く、熱くなっていった。

やがて縋子の片手が下腹部に降りた。するりとラムミの太股に入って奥を探る。滑らかな手だった。ラムミは内股を擦られてくすぐったさが湧いたが、愛撫された胸と同じように、次第に疼くような快感に変わっていく。

ラムミが無意識のうちに股間を押さえると、縋子の手がそれを退けた。

「脚、開いて」

ラムミが指示通りに脚を開くと、縋子の指が這った。

優しく割れ目をなぞり、人差し指で頂きにある突起を軽く引く搔く。水中での愛撫は柔らかく優しい感触だったが、初めての前戯を受ける女性器は感覚が鈍く、ちくりとした痛みを伝える。

ラムミは解<sup>ほぐ</sup>れてきた身体をほんの少しだけ固くした。

「あら、痛かった？」

「少しだけ」

縋子は中指で秘裂をなぞりながら、人差し指で陰核を上下に動かす。肉芽がくりくりと擦られる度に、むず痒いような快感が、耐え難く鋭いものに変わって行く。下腹部に熱が生まれ、内側に溜まって行く感覚。男の体で言えば、勃起するのに似ていた。下半

身に血がどつと流れ込んでいく。

縋子が優しく谷間をなぞる。そこはじわりと濡れていて、ラミは愛液がお湯の中へ溶け出していくような感触を覚えた。おそらく実際に濡れてはいるのだろう。

ラミが刺激に身をよじる様子を眺めながら、縋子はラミの耳の穴にふうつ、と息を吹きかけ、艶のある声で言った。

「随分と感度が良いのね。もともと淫乱なのかしら」

「そんなことは」

くにゅつ、と縋子がクリトリスをつねり、ラミは思わず身体を震わす。

「今、そんなこと無い、って言ったかしら？」

諫めるような縋子の声。その間も、縋子の手は休むこと無く愛撫を続けていて、ラミは甘い熱に浮かされていた。

「無い……つんう……」

言葉は声にならず、ラミが自分でも驚く程の、甘い喘ぎが唇から漏れた。

下腹部が熱い。その熱を散らすかのように、縋子の指先が陰核を擦る。蕾を中指でぎゅつと押さえつけ、人差し指と薬指で左右を刺激する。切なさに似た快感が生まれる。胸にこみ上げるように湧いたそれが、脳を麻痺させていく。

Report03 : ♀Creator VS ♀Creator

十一月十日(月)雨

外は雨だった。

秋から冬へと気候が変わり始め、すっかり肌寒くなった空気の中、ラミはぎこちない動きで内股気味に歩いてラウンジへ向かっていた。

三つ編みを解いた長い緑髪が背中中で揺れる。その頭の上にはヒュッケの黒い猫耳、赤いワンピースのミニスカートの下からはヒュッケの尻尾。猫耳も尻尾もどちらも生きているように無邪気に動く。黒い尻尾が動く度に、先端に付けられた鈴がチリンと鳴り、ラミは苦痛に頬を染める。

尻尾の根元には、小玉セルを繋いだ珠数じゆずが付いていて、それを肛門に入れているのだった。歩く度に直腸でアナルビーズが蠢き、お腹が圧迫されて苦しい。浣腸で中身を綺麗に出したにも関わらず、常に便意があった。

女性の身体に何故こんな玩具を突っ込むのか。男性であれば前立腺があるので快感を得ることができるが、女性では苦しいだけだ。ギルドメンバーの男チエイサーの指示通りに

したものの、正直なところ、ラミは理解できずにいた。

こうなったのには理由がある。一時間ほど前のことだ。

ラミは自室のベッドに横たわって赤いプリーツスカートを捲り上げて啞え、パンツを履いていない両脚を広げていた。縺子の指の動きを真似しながら女性器を弄るが、どうも気が乗らないし、気持ち良い訳でも無い。マスターベーションの実験だった。

そこへ、パタパタと小さな足音がしたかと思うと、ギルドの女クリエーターがラミの部屋に飛び込んだ。

小柄な身体に整った顔立ち。金色のふわりとした長髪の上には、ピンクの可愛いフリルがふんだんにあしらわれたカプラのヘアバンド。陶器のように白い肌をした、人形のような容姿の美少女だった。

ラミはベッドから起き上がった。彼女の名前が思い出せず、しばし記憶の糸を辿る。とはいえ、ラミはほとんどのギルドメンバーの名前を覚えていない。

女クリエーターは股間が全開のラミを見て顔をひきつらせた。が、大きなエメラルドグリーン色の瞳で、ラミの容姿を上から下までぎっと検分して、につこりと笑顔になった。

「良かった。ラミよりマリイのほうがずっと可愛い！」

ラミは彼女の名前がマリイだと思ひ出す。ギルドお抱えの製薬クリエーターだ。マリイが唇

を開くと、八重歯がちらりと覗いた。

「女クリエって聞いて、マリイとキャラが被ってると思ったけど、関係なかったみたいじゃー」  
♪

「そうですか」

ラミはさして興味なさそうに応える。

「全つ然、可愛くないし、緑髪に三つ編みだもの」

「そうですか」

ラミがオナニーの真似事を再開すると、マリイは拍子抜けしたように言った。

「なんでそんなに反応薄いの？」

「自分の外見には興味ないです。ところで、緑髪に三つ編みは悪いのですか？」

偉そうに腕組みをして、マリイは鼻で笑った。

「人気ワーストナンバーワンよ」

「では、何が人気ですか」

マリイは金髪をかき上げて得意気に言う。

「金髪かピンク髪のロングよ。マリイのこと！」

「そうですか」

ラミの淡々とした反応に、マリイは拗ねた表情<sup>す</sup>をする。整った容姿でのその姿は、ちよつとした絵や写真の切り抜きのようだった。

「いいわ。マリイのほうが女の魅力がずっと上だつて思い知らせてあげる。勝負にヤー！」  
「そうですか」

それを肯定の返事と受け取り、マリイは可愛らしい足音を立てて廊下を走っていく。

果たして。

ラミとマリイは、ギルドメンバーの趣味により、ヒュッケの黒猫セットを身に付けてセックス勝負することになった。何故、女の魅力の勝負がセックス勝負になるのかは全く理解できなかつたが、良い実験になるとラミは思った。

ラミがラウンジに到着すると、数人の男ギルドメンバーが集まっていた。談笑していた男たちは、登場したラミの姿を見てどよめく。縞子に教わった化粧<sup>ほどこ</sup>を施し、髪を手入れしたラミは、そこそこの美少女になっていた。

その態度を疑問に思いながら、ラミはふらふらと居間の中央に進み、同じ装備をしたマリイの前に出る。クリエイターの茶色のワンピースと、赤いワンピースが横に並ぶ。

背が低い二人が一緒に居る様子は、二匹の黒猫が仲良く寄り添うようだった。

マリイはラミを「瞥いちめくしてふふんと笑った。

「逃げずに来たのね。褒めてあげる」

「そうですね。実験ですから」

「余裕ね！ 思い知らせてあげるのにヤー！」

憤然とするマリイの横で、ふと、アイスクリームのような甘い香りが漂っているのに気付いて、ラミは尋ねた。

「何故バニラエッセンスを付けてるんですか」

「これは香水なの！ 失礼にゃん」

ギルドメンバー達が笑った。「あいつ中身変わってねーぞ」「安定のINT99のアホだわ」という声があった。

何を当然のことを言っているのか、とラミは訝いぶかしく思う。それくらい外見が様変わりしていることには気付かない。

二人の前には男チェイサーがソファに腰掛けている。彼が勝負の審判のようだ。名前は覚えていないが、彼は確か娼館を経営していたはずだ。豊富な経験から、公平なジャッジができるという判断なのだろう。

チエイサーが立っている二人に言った。

「じゃー始めンぞ。最初はフェラ勝負な。マリイ、お手本を見せてやれ」

「はい」

マリイは明るい返事をした。床の上に膝をついて座り、チエイサーの股間に顔を埋めると、ズボンのチャックを口で啜えて下ろす。

ラムは早くも、自分には思いつかないその行動に驚いていた。ラムはマリイがどうして突つかかるのか興味があったのだが、もっと面白いデータが取れそうだと直感した。

マリイは下までチャックを下ろすと、小さな口を開いてチエイサーのペニスを口に含む。

口内で舌を這わせ、先端を輪を描くように舐め、喜色の笑みを浮かべてしゃぶる。苦い先走りも綺麗に舐め取り、管の中から吸い出すように喉でぐつと飲み込む。

蜜口の清めが終わると、次に亀頭の下溝に沿って、尖らせた舌先でくすぐるようになぞる。ゆつくりと焦らすような動きだった。

その間はずっと、クリエイターの手袋を嵌めた指先で根本を刺激していた。右手の親指の腹で裏筋を軽くなぞり、左手は親指と人差し指を輪にして根本を扱く。

口の中の一物が勃ち上がると、マリイは喉の奥までチエイサーの雄しべを飲み込んだ。固い感触を楽しむように口に含み、舌全体で裏筋を舐め上げる。



敏感な部分を愛撫され、チェイサーの表情が少し変わる。

それを見て気をよくしたマリイは、頬をすぼませて男性器を吸い、より丹念に舐め上げる。

チェイサーは時々、マリイの顔に垂れた金髪をすくっては耳の後ろに搔き上げる。耳に触れられるとマリイはくすぐったそうにした。

マリイの動きが変わり、バキュームフエラを始めた。激しい動きでマリイの頭部が上下に動き、艶やかな金髪が揺れる。唾液が絡んだ陰茎が入りする度に、ぐぼつ、と水音が鳴った。生殖器の根本に添えたマリイの左手はずっと小刻みに上下に動いていて、男の射精感を煽っている。

深く飲み込んでいるせいで喉の奥まで突かれているのだろう、マリイの瞳は反射で涙目になっている。その潤んだ目で、上目遣いでチェイサーを見上げながら奉仕を続ける。

チェイサーはそんな表情に満足してマリイを見返す。やがて、眉間に皺を寄せると、「もういい」と言つてマリイの頭を優しく押し返した。マリイが口を離し、二人の間に銀色の糸が垂れる。マリイは惜しそうな顔をしていたが、チェイサーが「次、オマエな」とラミを指名すると、すごすごと後ろに下がった。

ラミはチェイサーの前に歩み出て、マリイと同じ場所に座る。いつもは冷たい床が、マ

味わう。やがて、ラミは力なくマリイの胸に倒れ込んだ。

チェイサーが未だ固い。ピスを引き抜く。ラミの身体に、肉棒の代わりに冷たい外気が流れ込む。

気がつくのと、周りに輪が出来ていた。ギルドメンバー達が欲情に満ちた獣のような目で見ていて、ラミは惚けた頭で視線を返した。全員がズボンの前を膨らませていて、マリイを見ている者もいれば、ラミを見ている者もいる。

ああ、自分も性欲の対象になっているのか。と、理性の戻り始めた頭で判断する。

「勝負つていうから待っててやったけど、そろそろ混ざっていい？」  
ラミを熱っぽく見ていたホワイトスミスが口を開く。

彼は砦の中でラミと同室で、持ち前の気前の良さで面倒見の良さで、ラミがギルドに入ってから色々世話をしている男だ。ラミがまともに会話できる数少ないギルドメンバーの一人でもある。

「マリイがいくまで待ってやれ」

マリイの顔は情欲に上気し、何でも良いからすぐに交わりたいという表情だった。

チェイサーは仰向けになっているマリイの上に覆い被さり、正常位で肉棒を挿入する。

マリイは茶色いブーツを履いた脚を自分から高く上げ、チェイサーの両肩に乗せた。その

ままグツと腰をチエイサーに寄せ、奥まで入る姿勢を取る。チエイサーはマリイの腕を掴むと、初っぱなから激しく前後運動を始めた。浅く突いてはお腹側にあるざらついた天井を打ち、深く突いては子宮口を叩く。

既に出来上がっていたマリイは切なそうな顔をしながら嬌声をあげる。

少女のような顔に、女の悦びに満ちたアンバランスな笑みを浮かべる様子は、周りの男達の劣情を増幅させる。

マリイは激しい突きに快感を味わいながらも、相手を満足させるためにサーピスをする。膣口をわざと締め上げ、精を搾り取るように膣壁をひくひくと動かす。チエイサーが射精感を煽られ、少し苦しそうな顔をした。

ラムは仰向けになったままそれを眺めていたが、ゆっくりと起き上がった。チエイサーと交わって揺れているマリイの下半身に手を伸ばし、ヒュッケの尻尾を引っばる。

数珠つなぎになったアナルビーズが、一個だけ外に出た。

「んにやつ！」

マリイが変な声を出す。ラムはゆっくりと尻尾を引き、小さな玉を二個、三個と引き出す。そのたびにマリイがびくんと身体を震わせる。

「何するの、や、やめて……」

かく、プロフェッサーの強く掴んだ指が容易に食い込み、男の身体以上に痛みがあった。「へえ。腕力も女の子並みになっちやうんだね」

プロフェッサーは抵抗しなくなったのを見ると、ラムミの腰を浮かせ、後背位バックの体勢を取り、そそり立った。ペニスをラムミに突き入れた。

「……ッ」

オーガズムを感じたばかりの身体は、心と裏腹に素直な反応を返す。

プロフェッサーは四つん這いになったラムミの背中に手を置いて、リズムカルに花園の奥を突く。その動きに合わせて短い喘ぎを上げ、ラムミの意識はどろりとした薄暗い悦楽に沈んでいく。尿で汚れたのがどうでもよくなるくらい快感が脳を痺れさせて思考を溶かす。

プロフェッサーの指先がラムミの脇の下に伸び、両側から乳房を押し上げる。そして、尖った先端を強く摘まんだ。

下半身と同時に、そこからも甘い痺れが湧き、ラムミは身体を仰け反らせる。全身が言うことを聞かなくなったようで、ゾクゾクとした寒気のような震えが止まらない。

「いった後だと凄いでしょ。女の子は何回もできるしね」

再び乳首をきゅうつ、と摘ままれ、ラムミは悲鳴に似た喘ぎを上げた。逆らえない快感に縛られ、ラムミは与えられるままに劣情を貪る。

教授の指先は優しく、掠<sup>かす</sup>めるような動きで肌を撫でたかと思うと、フェイントのように尖りを強く潰す。緩急のついた動きにラミは翻弄され、憎まれ口も叩けず、唇からはいやらしい声しか出なくなつた。

「どう？ 犬みたいに犯されるの」

プロフェッサーが耳元に熱い息を吹きかけ、軽く耳朵を噛む。それすらも感じてしまい、ラミは目を潤ませて床に顔を擦りつけ、されるがままになつた。

「ほら、気持ちいい？ つて聞いているの」

「……ッ、そうですね」

ラミは熱に浮かされて精一杯に答える。あまりの刺激に床に爪を立て、プロフェッサーが動くままにがくがくと腰を振つた。そのままラミは絶頂に達した。今まで以上に大きく震え、男の陰茎を締め上げる。それでもプロフェッサーのほうは気を達することができず、突きを止めない。

「つく……ふ」

身体を休めることも冷ますこともできず、ラミの身体は二度目の絶頂へと向かう。

もつと快感の正体を味わいたくて、自分からも腰を振るようになっていた。気がつくともプロフェッサーは動きを止め、ラミが腰を擦りつけるのを嘲笑して見下ろしていた。